2025 年の啓蟄（けいちつ）は 3 月 5 日です。

　啓蟄の「啓」は「ひらく」、「蟄」は「土中で冬ごもりしている虫」を意味します。
大地が暖まり冬眠していた虫が、春の訪れを感じ、穴から出てくる頃です。
啓蟄の風物詩のひとつとして「菰（こも）はずし」というものがあります。
これは冬の間に、害虫から松の木を守るために付けられた菰を、
温かくなる春を前に外すという行事です。
菰とは藁（わら）で作るむしろのこと。
虫が動き出す啓蟄の時期に外すことで、なかに入っている害虫を
駆除する目的があります

　啓蟄の時季に鳴る雷のことを「虫出しの雷」と呼ぶことも。
これは春の雷である「春雷（しゅんらい）」の音に驚いた虫たちが、
冬眠中の土・穴のなかから飛び出してくる様子を表現したものとされます。
俳句でも雷を表現する春の季語として、たびたび用いられる言葉です。
春雷は夏の夕立とは異なりすぐに鳴りやむことが多く、生き物たちに
とっても春を告げる合図となっているかもしれません。
啓蟄の時期に旬を迎える花として代表的なものが「桃」です。
ちょうどこの時期に、桃のつぼみが開き花が咲きはじめるのが特徴。
鮮やかなピンク色を見ると、春の訪れを感じさせます。

修二会（しゅにえ）
　奈良市の東大寺の二月堂で毎年３月１日から１４日まで行われる法会です。
3 月 12 日深夜（13 日の深夜 1 時半頃）には、「お水取り」といって、若狭井（わかさい）という井戸から観音さまにお供えする「お香水（おこうずい）」を汲み上げる儀式が行われます。
この行を勤めるの練行衆（れんぎょうしゅう）と呼ばれるの 11 人の僧侶の道明かりとして、
夜毎、大きな松明（たいまつ）に火がともされます。
「お松明の火の粉を浴びて一年の健康や繁栄を祈願する」と、
縁起の良いものとされ、その燃えかすをお守りとして
持ち帰る人も多くおられます。
3 月 12 日の籠松明（かごたいまつ）は長さ 8m、重さ約 70 kgで、
お松明のなかで最も大きなものです。

『 犬耳を　立て土を嗅ぐ　啓蟄に 』　　高浜虚子

　犬が耳を立てて土を嗅いでいる啓蟄の日の散歩道だ。
「土の中から虫が出てくる日」ということで、犬が虫を探して嗅ぎ回っています。
1 年を通して見られる行動ですが、啓蟄の日ということでより感慨深く感じている句です。